

令和2年度あいちラーニング推進事業研究報告書

研究テーマ	主体的・対話的で深い学びを推進するための取組の研究	
本年度の研究目標	<p>(1) アクティブラーニンググループを活用した「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」を推進する。</p> <p>(2) 様々な教科においてデータ収集や分析技術を身に付けることで地域社会から信頼される生徒を育てる。</p> <p>(3) 教師の指導力の改善につながる評価方法の開発をする。</p> <p>(4) カリキュラムマネジメントについて認識し理解を深める。</p>	
研究の実施内容		
実施月日	内 容	備 考 (対象生徒等)
7月7日 7月9日 7月21日 7月29日 7月31日 8月3日 8月26日 8月28日 9月30日 10月8日 11月30日 1月中旬 2月3日 3月中旬	<p>教科主任者会（本研究の目標や実施方法について）</p> <p>研究アドバイザー依頼及び打ち合わせ アドバイザー：愛知教育大学准教授 斎藤ひとみ先生</p> <p>各教科会にて「校内委員会（あいちラーニング推進事業）」への参加者の選定</p> <p>第1回校内委員会 研究の趣旨や概要、計画などの情報を共有し、今後の予定等を確認 アクティブラーニンググループ建設における業社との打ち合わせ</p> <p>愛知県立南陽高等学校視察（アクティブラーニンググループ建設に向け）</p> <p>名古屋市立西陵高等学校視察（アクティブラーニンググループ見学）</p> <p>第2回校内委員会</p> <p>愛知県立杏和高等学校視察（アクティブラーニンググループ建設に向け）</p> <p>10/8に向けた事前準備及びアクティブラーニンググループ建設について確認</p> <p>愛知教育大学准教授斎藤ひとみ先生による講演「アクティブラーニングの視点にたった授業改善方法の検討」受講（職員研修会）</p> <p>第3回校内委員会 各教科の進捗状況、公開研究発表会について 公開研究発表会における担当教科を「理科」に決定</p> <p>公開授業（理科）実施者による情報交換会</p> <p>公開授業（理科）・研究協議会（理科・校内研修会） 職員会議で情報共有</p> <p>1年間の取組について紹介 研究報告書の作成及びHP掲載準備</p>	本校3年総合ビジネス科及び1年普通科
研究成果の評価及び普及・還元に関する実績		
<p>本校は、研究主幹校として今年度「主体的・対話的で深い学び」を推進するため、研究目標を設定し校内委員会を中心に各教科にて研究を進め、学校全体で主体的・対話的で深い学びを研究・実践した。</p> <p>研究アドバイザーを愛知教育大学准教授斎藤ひとみ先生に依頼し、10月に本校職員を対象とした研修会（テーマ「アクティブラーニングを活用した授業改善方法の検討」）を斎藤先生に開催していただいた。「ロイロノート・スクール」を起動し、「具体的な授業やどのような場面でアクティブラーニングを活用できるか」を想定し、イメージを膨らませることで「どのような学習効果が生まれるか」、「取り入れていきたい授業形式」を確立することができた。</p>		

2月に尾西地区高等学校向けに公開授業及び研究協議会を実施予定でしたが、緊急事態宣言に伴い今年度は校内研修会としての実施となった。授業者が授業の狙いを明確にし、反省会では参観者と共に振り返りを行った。

今年度はICT機器を活用し効果的な授業実践を実施できるようアクティブラーニンググループの建設に向けて準備整備を行った。

各教科の研究への取組は下記のとおりである。

近代小説に登場する人物の生き方や考え方について考える。①現代文の授業にて、中島敦「山月記」を読解する。②古典の授業で「山月記」の基となった作品「人虎伝」の一部を読む。③「山月記」と「人虎伝」の相違点を探す。④代表者の発表により、クラス全体で相違点を確認する。⑤ワークシートを用いて、中島敦が「山月記」を書く際になぜ「人虎伝」から内容を変えたのか、その意図や時代背景について話し合う。⑥グループの意見を代表者が発表し、クラス全体で共有する。⑦学習を踏まえ、意見文を書く。

古文作品の読み比べをする。①兼好法師『徒然草』と本居宣長『玉勝間』を読み、兼好法師の主張、それに対する本居宣長の批判的態度を理解する。②ワークシートを用いて、両者の主張の違いを整理する。③教員の提示した資料や自分で調べた内容をもとに、兼好法師の立場になって本居宣長の批判に対して反論する文を書く。①～⑦を異なるクラス（2年普通科と2年総合ビジネス科）で実施し、相違点や改善点を発見した。

話し合いや考えをまとめる活動を通して、多くの生徒が他の意見に触れ、自分の考えを深めることができた。また、普段の座学では活躍することが難しい生徒が鋭い意見を出したり、授業外で自主的に調べる生徒が出てきたりした。

複数人の教員でこの活動を行ったが、事前に評価基準を明確にし、授業内容をすり合わせておくことで、曖昧な評価を避けることができた。（国語）

普段の授業に相談・教えあいを積極的に取り入れ、グループで問題解決を行った。他者の着眼点を知ることで解決の糸口を見つけることや、自分の考えを伝える中で間違いに気づき修正することができていた。また、同じ目線で教えられたことで理解が深まり、次の問題では教えてもらった生徒の方が早く解けることもあった。3学期には、授業以外でも相談しあう場面を見ることができた。

数学の応用問題は過去の内容（他の分野）が組み合わされていることが多く、そこまでの知識の定着が弱いと、ただ教えてもらうだけになってしまう。実際に何人かいた。習熟度の異なる生徒が混ざっている状況を考えたうえで、どのように授業を展開するか引き続き考えていきたい。（数学）

「東海3県のおすすめの場所とその理由」をグループ内でまとめて、英語でプレゼンテーションを行い、JETとALTの両方でプレゼンテーションについて評価した。まず、個人でおすすめの場所と理由を考え、その後、グループのメンバーと対話しながら双方の考えや価値観について理解を深めた。内容を正確に伝えるためにはどのような単語や文法を使って表現するかをグループ内で話し合いながら、原稿を制作し、クラス全体にプレゼンテーションを行った。主体的・対話的で深い学びの実現につながる授業改善といえる。

他学年の授業では、クロスワード・パズルを利用して新出単語を覚えるといった活動を行った。教科書に出てくる新出単語をそのまま丸覚えするのではなく、クロスワード・パズルを利用することでより主体的に取り組んでいた。ペアで答え合わせをすることで、対話的に理解を深めることができ、覚えた単語の知識を活用して本文内容を確認することができた。

ICT機器を利用したインプット及びアウトプット活動を中心とした授業を行った。時間の経過とともに英文が消えていくように作られたパワーポイントのスライドを利用して授業を行った。教科書で使われている基本英文を個人で覚え、ペア活動でそれぞれのインプット状況を確認し、再度例文を覚え、黒板に映し出されるパワーポイントのスライドを利用してアウトプットをおこなった。その後、基本英文を少し加工した文章を使って理解度を確認した。生徒はゲームのような感覚で取り組み、前向きに授業に参加していた。（英語）

免疫分野における免疫ゲームの作成とアクティブラーニングとしての活用実践とその評価を目標

に「免疫ゲームの作成（科目：生物基礎）」において、実践→評価→反省→ゲームの改良という流れを繰り返した。

知識の伝達のみであれば、座学で十分賄える。しかし、それでは生徒に十分な実感を伴って理解させることは難しいと考える。そのために理科では実験を行うなどして、座学の知識を実際に体験して再確認させるが、「免疫」は実験を行うのが難しい分野である。そこで、アクティブラーニングの一環として免疫ゲームを考案した。ゲームを生徒が主体的、対話的に行う中で、自然免疫と適応免疫の流れを体感し、座学で得た知識を実感して、理解を深めることを目的とした。また、座学のみでは測りにくい観点別評価にも利用できるかと考える。

研究成果の評価方法として、①アンケートを実施し、生徒がゲームの意義を理解、実感できたかどうかを確認した。②免疫の確認テストを、ゲームを行う前と後の計2回実施し、ゲームの前後での得点の変化を確認した。①アンケートでは、多くの生徒がゲームの意義を理解し、有意義だと感じたことを示すデータが得られた。また、②確認テストでは、ゲームを行うことでわずかではあるが得点の向上が見られた。このことから、ゲームを行うことが知識の定着に多少なりとも貢献したと考えられる。

研究成果の評価としては、ゲームを行うことに一定の有意性が認められたが、座学以上の効果があるのかは今後も検討していく必要がある。また、ゲーム自体の簡易化、改良が今後の課題である。

研究授業には理科に限らず多くの教科の先生方にご参観いただいた。本研究が他教科に活用できる手法かどうかは分からないが、他の先生方の指導に還元できる点があれば幸いである。（理科）

担当の授業時に各生徒に自己評価シート（スキルシート）を配り、個々で取り組めるように授業を進めていった。毎回生徒がどこまで、できるようになったかを振り返らせて、個々のレベルを理解させて取り組ませた。色々なレベルのスキルがあり、個々のレベルを自分で選択して毎回の授業でチャレンジをするようにした。その過程で観点別評価をしていった。各グループにテーマを与えて、授業づくりをさせた。グループごとに役割をつくり生徒は話し合いながら授業づくりを進めていった。

生徒主体で授業を進めることはなかなか上手いかず、教材研究の大切さを改めて実感すると共に生徒への声かけのタイミングや伝え方の重要性も感じる事ができた。生徒によって進捗状況はまちまちで、できるけど苦手なことにはチャレンジしない生徒や出来ないからチャレンジしない生徒への声掛けはこれからの課題になった。評価するのも難しく特にやる気のあるクラスで差をつけるのは難しく感じ、評価の幅を作ることも課題となった。（保健体育）

教科商業における学校設定科目「地域プロデュース」、「課題研究」、「総合的な学習の時間」においては、自ら課題を見つけ、自ら考え、主体的に判断し的確に問題を解決する資質や能力、広い視野、仔細な視野を持ち合わせたグローバル人材への成長を科目目標に、ブレインストーミング、ダイバート、グループディスカッション、プレゼンテーションを積極的に実施した。この研究目標でもある「様々な教科においてデータ収集や分析技術を身に付けることで地域社会から信頼される生徒を育てる。」を達成できるよう市内へフィールドワークに出かけ、現状や課題を認識し、発表会及びコンペティションを実施し、地域社会が抱える課題等を考察する力を養った。また、高齢者疑似セットを着用し、近隣のコンビニエンスストアにて商品購入体験をし、高齢者の立場からマーケティングを考察する機会を設けた。

自己評価を意識したポートフォリオ評価シートを作成し学習内容の定着を自らが確認できるようにした。ルーブリック評価なども取り入れ様々な視点で主体的・対話的で深い学びについて研鑽した。

生徒貸出用タブレットが供給されることになっており、来年度は主体的・対話的で深い学びを更に探求するため、授業改善、ICT等を活用していきたい。（商業）

今年度は各教科による研究及び取り組みが主となっており、目標としていた「教師の指導力の改善につながる評価方法の開発をする」「カリキュラムマネジメントについて認識し理解を深める」ところまで踏み込めていないため、来年度は各教科の取り組みを教科の枠組みを超えて実施し、効果的な授業展開を研究していきたい。